

勝沼砂防堰堤

山梨県甲州市
JR中央本線「勝沼ぶどう郷駅」から車で15分

Katsunuma Sediment Control Dam

資料提供：1-5.9.山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第234集 撮影：6-8.10.大村拓也

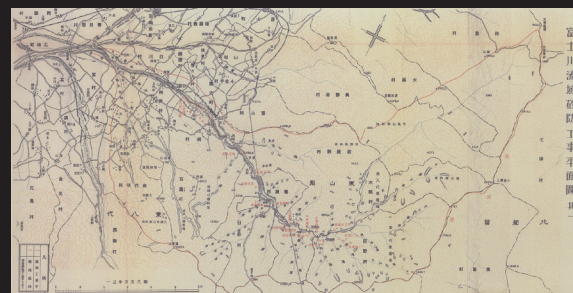
風景に溶け込んだ砂防施設群

勝沼堰堤がある1級河川「日川」は、過去に何度となく氾濫を起こし、明治40(1907)年、明治43(1910)年の大水害では甲府盆地に甚大な被害をもたらした。明治政府は河川改修及び砂防に関して国が直轄で改修する河川を選定し、これを第一次治水計画と呼び、そのうちの第1期河川に富士川を選出した。内務省視察団の視察の結果、直轄砂防工事として日川上流を対象に明治44(1911)年に工事が開始された。

この工事では、まず河状の整理のため下流側に74ヶ所のT字型水制工(頭部を練石積、基部を空石積の構造)を設置している。大正4(1915)年の水制工の完成を受け、続けて勝沼堰堤の工事に着手し、大正6(1917)年に竣工している。その後、勝沼堰堤、日川水制群の保護のため、上流側に12基の砂防堰堤と日川流域に計4基の床固を設置し、昭和8(1933)年、23年間にわたる継続直轄工事が終了した。

勝沼堰堤は、屈曲していた河道を堰堤築造により締め切り左岸の岩盤を切り開いた水通しに移す事で、水の流れの円滑化と河川管理の容易化を目的に作られた。堤高19.4m、堰堤幅38.5m、岩盤上河道幅45.5mの巨大堰堤であり、人工構造物と自然岩盤を併用したハイブリット構造とでもいべき特異な構造を持っている。築造された堰堤本体は空石積みであるが、旧河道を遮蔽する堰堤基礎や水に接する部分の石積みの目地にはコンクリートが用いられている。これらは、日本で初めてコンクリートにより築造された芦安堰堤(山梨県南アルプス市)の1年前に施工されており、本堰堤の工事実績を持って芦安堰堤が施工されたと考えられる。また、岩盤への通水穴の設置や直壁岩盤に流路を移しウォータークッション効果を期待するなど、ここで用いられた土木技術には、近代砂防技術確立を目指す内務省土木局の思惑が垣間見える。

勝沼堰堤は平成16(2004)年の公園整備事業に伴う発掘調査が行われるまで、築造された堰堤上部は葡萄畑と草木に覆われていた。水通しとなっていた岩盤はあたかも自然の滝の様であり、注意して見ないと人工物であることが分からない。同様に日川水制群も水制間が葡萄畑となっており、近年は地権者ですらその存在理由を忘れるほど風景に溶け込んでいる。またこれらの砂防施設が完成したからこそ、近年世界的評価を上げている山梨ワインが勝沼周辺で安定的に造れるようになったのは間違いのない。多くの人命と財産を奪った災害を鎮めた砂防施設が、やがて人々の記憶から整備の歴史を忘れさせるほど日常に馴染んでいる姿は、デザインに疎くなった現代の土木技術者には学ぶべきものが多くある。(石井 敬康)



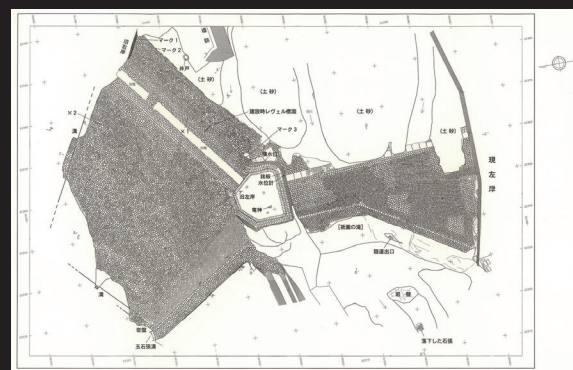
1.富士川流域砂防工事平面図



2.工事前の状況

3.工事中の状況

4.竣工時



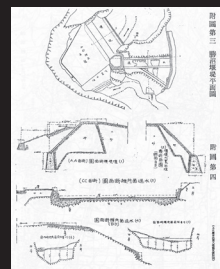
5.勝沼堰堤平面図



6.現在の勝沼砂防堰堤(旧右岸側)

7.写真中央が旧左岸側

8.岩盤の上に石を積み造られた水通し部



9.勝沼堰堤平面図・断面図



10.現在の勝沼砂防堰堤(下流側)

中部エリア

- HANDS 042 牛伏川階段工
- HANDS 043 西天竜幹線水路円筒分水群
- HANDS 044 旧住吉浄水場
- HANDS 045 末広橋梁
- HANDS 046 明治用水旧頭首工
- HANDS 047 堀川・中川運河 松重閘門
- HANDS 048 木曾川下流改修
- HANDS 049 木曾川橋
- HANDS 050 富岩運河 中島閘門
- HANDS 051 小牧ダム
- HANDS 052 末浄水場

A~A SECTION

